

にぎやかに開幕した 1987年の第1回マスターズ駅伝

春たけなわの4月。日本列島の桜の季節は終わったようだが——。いまだに新型コロナウイルスは影を潜めず、皆さんは花見どころではなかっただろう。マスターズの活動もまだまだのようだ。卯月といえば清明。辞典によると『4月4～5日頃・万物が清新な活気にあふれてくる』とある。マスターズの会員の方々も汗を流したいのでは。今月は1987年にスタートした都道府県対抗全日本マスターズ駅伝を振り返った。

豪華な顔が勢ぞろい

大阪府吹田市の日本万国博覧会記念公園が熱く燃え上がった——。

1987年4月12日のことだ。日本マスターズ連合による第1回都道府県対抗全日本マスターズ駅伝競走大会が誕生、この日、火ぶたを切ったのだ。同駅伝のうたい文句は「本邦初公開の中・高年駅伝」だった。時期はよし。周辺にソメイヨシノの花びらが小雪のように舞うなか、駅伝初の“男女混成”はスタートした。距離は8区間42.195km。

各チームの顔触れも豪華だった。1区は女性で、大阪府は女子マラソンのパイオニアである主婦・村本みのるさん（当時・46歳）が受け持った。トップは富山県の広浜良子さん（同・48歳）だった。広浜さんは京都の都道府県対抗女子駅伝でその実力は証明済み。5000m16分49秒1の力を発揮したが、残念ながら富山のフィニッシュは30位となった。

5位は大分で、1区はかつての中距離界の女王、大分県の河野信子さん（同・36歳）。400m、800m、1500m、4×400mRを含め、「23回」の日本記録をマークした。この日は2人の男の子の入学式だったが、ご主人に任せたとか。河野さんは「風邪をひいて、体調はよくなかったけど、6位で中継できてよかった」と胸をなで下ろした。

男子の顔触れもなかなかのもの。3区になった大阪府の3区は、1964年

東京五輪マラソン代表の寺沢徹さん（同・52歳）がタスキを掛けた。「駅伝に出たのは14年ぶり。プレッシャーもありましたが、5.167kmを17分半で走れたので、予定どおりだったのかな」と手応えを語った。

8位で入った福岡のアンカーは、あの君原健二さん（同・46歳）だ。12位から4人を抜いて貫禄を見せた。ご存じのように1964年東京、68年メキシコ、72年ミュンヘン各五輪のマラソン代表となり、それぞれ8位、銀メダル、5位と抜群の成績を収めた。フィニッシュすると女性ファンから花束が手渡されるなど、人気も相変わらず。君原さんは「福岡県の代表として走ったのは12年ぶりです。久しぶりの駅伝でしたが、スカッとした気分です」と笑顔を見せた。

この君原さんとミュンヘン五輪でマラソンに出場した采谷義秋さん（同・42歳）は広島県代表として7区で登場。チームは6位となり、采谷さんは区間賞をゲット。采谷さんは5.167kmを16分21秒で走った。「毎日、30kmは走っているの、自信はあったかな。でも、タスキを掛けると緊張しますね」と言い、汗びっしりの体

にタオルを当てた。

元五輪マラソン代表のなかで、最年長は58歳の山口県代表・貞永信義さんである。1960年ローマ大会の代表だった。この日は4区に出場し、山口は12位だった。「う～ん、4人か5人抜かれたか。調子は良かったんだけど（区間36位）」。貞永さんは生前、「生涯かけて月までの距離、38万kmを走り抜く」を目標にしていた偉大なランナーだった。

最年長は男子76歳
女子は61歳

参加者のなかで最年長のランナーは？ 男子から見ていくと、福島県代表として6区を走った紺野政男さんで



兵庫の4区・山本さんから5区の西川さんへ

76歳。42歳から始めたという卓球が「少しでも元気で長く続けられるように」と65歳から走り始めたが、「1人でもできる走りの方が」と、こちらに熱中した。「今日は2人抜いて、1人に抜かれました。さて、答えは？」と言って笑わせた。走り終えた後、息一つ乱れていなかったのはさすが。紺野さんは6区5.167kmを22分49秒で走り、区間39位。チーム福島は33位だった。

この駅伝が始まる1年前の全日本マスターズ選手権では、M75・400m、1500m、5000mで優勝し、三冠を取ったことのある紺野さん。「普段の練習では無理はしません。脚が痛くなるほど、無茶してはダメですよ」とアドバイスも。

女子は長野県の5区を担った渡辺うめさんの61歳。渡辺さんは5.167kmを26分22秒で走り切った。タスキをもらったときは25番目で、6区に引き継いだときは41位に。ご本人の区間成績は47位。

渡辺さんは「どれくらい抜かれちゃったのかな。私は距離が長いほど好きなんです。5kmではね。もっと距離があったらよかったのに」と笑いながら振り返った。

初代王者に輝いた兵庫 3位スタートから2区で逆転

輝く初代王者は兵庫で、8区間42.195kmを2時間27分09秒で走破した。兵庫から8秒遅れで東京が2位に入った。

兵庫は1区・花房佐美子さんが、1位の広浜さんから19秒遅れの3位で発進。2区・岩元辰男さんはタスキを受けた直後から猛ダッシュで前を走る富山、福井を追って逆転、首位へ躍り出た。3区・西尾勲さんへとタスキをつないだときは、2位の東京に130mほどの差をつけた。

以降は順風満帆のレース運び。4区の山本伝さんと、5区の西川美代子さんは共に区間賞で、後続との差をさら



桜の下を走る兵庫2区の岩元さん。福井、富山を抜いてトップに浮上

に広げた。次の6区・坪蔵位之さん、7区の炭本直弥さんは東京に追い上げられたが、最終走者・増田皓三さんが最後の踏ん張りを見せ、先述の通り8秒差で東京を振り切り、歓喜のフィニッシュだった。

兵庫の監督は松田政数さんで、レース後、優勝の原動力となった2区の岩元さんについて語ったとき、岩元さんの姿は消えていた。2日前、東京に住む実妹が急性肺炎で亡くなり、葬儀のためにチームを離れたのだ。岩元さんはレース前日にも上京し、妹さんのお通夜に参列。その足で駅伝会場に入った、という。

松田監督は「岩元さんから、事情を話すと、みんなが気遣うだろうから、監督の胸の内だけに、とくぎを刺されていた」と打ち明けた。

岩元さんは寝不足も何のその。チームのためにパワー全開で走り抜けた。岩元さん抜きの銅上げが始まり、アンカーの増田さんの体が宙に舞った。桜吹雪のなか、喜びに沸く兵庫チームの音がいつまでも尾を引いた。

うよ 駅伝誕生は紆余曲折を経て

都道府県対抗全日本マスターズ駅伝は難産の末、誕生した。駅伝を立ち上げようと、協力を惜しまなかったのは、日本マスターズ陸上競技連合の副会長



最終8区で東京の猛追を振り切り、フィニッシュテープを切った兵庫の増田さん

で料理研究家として知られた故人の土井勝さんだ。「紀文」を協賛に取り付けてくれたため、正式名称は「都道府県対抗'87全日本マスターズ駅伝紀文カップ」となった。

チームの編成は監督1、選手・控え選手10人の計11人。プログラムも凝っていた。当時の東照正・阪大医療短大教授らが「マスターズを科学する」と称して、走ることの良さを解説した。また、寺沢さんや君原さんが「私のトレーニング法」を紹介し、土井副会長が食事のアドバイスを。そのほか女優や歌手といった、さまざまな著名人が手記をつづっていた。

「レースの見どころ」は連合理事長だった鴻池清司さん（和歌山）が紹介。また、「我がチームの名物選手」のページもあって、その後に各チームの監督談話付きのメンバー紹介がずらり。

34年前に紆余曲折の末に旗揚げした都道府県対抗全日本マスターズ駅伝は、終わってみれば和気あいあいの雰囲気、大団円で幕を閉じた。

第1回全日本マスターズ駅伝

順位	タイム	チーム
1	2時間27分09秒	兵庫
2	2時間27分17秒	東京
3	2時間28分50秒	大阪
4	2時間30分21秒	鹿児島
5	2時間30分29秒	大分
6	2時間30分37秒	広島
7	2時間32分48秒	静岡
8	2時間32分58秒	福岡